
SCREW !

黒ぶりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SCREW!

【Zコード】

N7019E

【作者名】

黒ふりん

【あらすじ】

天涯孤独な駄目人間の俺が、どういつ詰か禁断の領域に手を出しちまったようだ。

(前書き)

数時間で書けた。
どうして書けたのかサッパリ分からん。

夕焼けに照らされた赤い絨毯のような道路を一步一歩歩いていく。家から駅まで一時間、電車に揺られ、さらに徒歩で一時間！それを毎日往復する。

なんでこんな苦労をして会社に行くのか？

答えは簡単、家賃が安い！

実はタクシーとかで会社に行くと半分の時間で済んだりする。自転車なんて持っていないし、そんな労力を使いたくない。歩くよりかはマシだが、金が無い。

ああそそ、俺はダメな人間なんだよ……

「せめてバイクとかあればなあ……」

チンタラ歩いているうちに、不意にこぼれた一言。

『…………』

それが引き金かは分からないうが、何かが囁いたように聞こえた。

「ん？」

キヨロキヨロあたりを見回しても誰もいない。

「…………気のせい…か？」

疲れが溜まったようだ、有給を使うか？

部長に嫌味を言われるな。

そんな事を考へていた時だつた。

「ジン…」と俺のつま先に何か軽い物が当たつた。

「なんだ？」

自身の影に遮られても分かつた。

六角形の金属片を着込んだ棒状のパーティ…ネジだ。

「結構つとこより新品だな、値札付いてるし」

どこかの業者が落としたのだろうそのネジは、値札が付いたままこの夕焼けに染まつたアスファルトに落ちていたのだ。

「とはいえ…」で会つたのも何かのご縁、今日は俺の家に泊まっていきなされつてか？」

時代劇っぽく決めてみたが、言つてなんだが恥ずかしくなつた。ネジをポケットに詰め込むと一田散に我が家へ向かう」と決めた。

約三十分後…

「ただいまーつて誰も居ないわな」

そりやそうだ安アパートに独り暮らし、彼女は居ないし料理もできない。

「嗚呼…君が女の子だつたら…」

先ほどポケットにねじ込んだネジを取り出し呟く。虚しい…

「……ハア飯にしよ」

ネジをちゃぶ台に放置し、お湯を沸かし、最近値段が上がってきて

いの三分麺にお湯を注ぐ。

「これで最後の一つ、明日からなに食つたらいいんだ?」
未来をあまり考えない俺でも胃袋の事になると少しは考えよつとする。

「まつ明日考えよつ

だが無駄な時間のようだつた。

それから数時間、三分麺食つたりテレビ見たりして、布団に飛び込むのが面倒になつたので、ちやぶ台に突つ伏して寝た。

ところが、そこから日常とは脱線した状況に陥つてしまつた。

『このラベルを取つてください。』
頭の中で、声が聞こえたのだ。

「うーん……なんだよもう

ぼやける視界に映つたのはあのネジ、

「あれ? なんで光つてるん?」
正直、夢だと思った。

『お願ひつラベルを!』

声の主がこのネジだと分かるのに数秒、

「ラベル?」

完全に夢の事だと思っていた俺は、迷うことなく値札を引寄せりやがった。

「ありがと」
いきなり頭の中ではなく、耳に聞こえたと思ったら視界が光に包まれていく。

「ほんとに、ありがとうー。これでお役に立てますっ！」

光のせいか輪郭だけは見えた。

それは、ショートカットの小柄な女性だった。

「……つづはつ」

気が付くと朝、俺は布団で寝ていた。

「なんだ夢か、少し残念」

恋愛ゲームとかやつた事が無いのにすごい想像力だな俺。

「夢がどうかしましたか？」

「どおうおおおおおおおおおおおーーー？」

意味不明な言葉が口から吹き出す。

そりやそうだ、田の前に夢の女の子が居るのだから。

「だだだ誰だよ君はーー？」

先ほどからキヨトーンとしている女の子に頭に浮かんだ言葉を発した。

「むつ…んしょ…ネジです！」

顔を俺の鼻先までズイッと寄せ、シユールな『冗談を』言ひ。

「なに書つてんだ、ネジはナニ?……」

無かつた。

「あれ、ネジは?」

「だから私だつて」

彼女の髪に大きな六角形の物体が見えた。

「は? あれ? ビュ」と?」

ますます混乱

「ねえ、それより!」飯作ったから一緒に食べよ?」「
といつあえず彼女の意見に賛成することにした。

「美味しい」

正直な感想だつた。

無論、高速を通り越して音速で食つている。

「ありがとう」

そう言つてはにかむ彼女の表情は可愛かつた。

「ふむ」

よし、だいぶ頭が冴えてきた。

目の前で幸せそうに飯を食つている少女はネジ、

夢の中で見た輪郭はショートカット。

田の前の彼女もまたショートカット、すこしウエーブ。

なぜか六角形の止め具はでかくなつて右側の髪を少し束ねている。
所謂、横ボニー。

「んん？　どうしたの？」

視線に気付いたのか、小首を傾げ尋ねる彼女、正直可愛いぜ……。

「い、いやその……そう、君の服つて
はめりかしたが、俺はある時眠った事を後悔する。

「『めんね、この姿になつたら裸だつたの、だから……』
畜生っ！　口リゴンじやねえが、目に焼き付けておきたかったぜ。」

「そなんだ。」

だが俺はラッキーだった。

裸にワイヤーシャツか……悪くない。

「そんなつ見つめないでくださいっ」

赤面、そして迫る拳！

鈍い音と鋭い激痛が顔面を襲つた。

「ぶるあああ！」

衝撃は凄まじく、身体は弧を描き、鼻血を撒き散らし床に叩きつけられる。

「あつしまつた」

暗転する意識の中、彼女の間抜けな声が聞こえてきた。

気が付いたのは夕方になつてからだつた。

天井の蛍光灯が眩しい。

後頭部にはなにやら軟らかいもの。

「あつきました？」

いきなり彼女の顔が飛び込んできた。

「ぬおつ！」

勢いよく起き、立ちくらみに襲われるが、自分の置かれていた状況よりかはましだ。

「あの、膝枕気に入りませんでした？」

心配そうに見つめる彼女は小動物のようだ。
いや……そのね、氣に入るとかではないんだよ。

「寧ろ気持ちよかつた、だから理性を抑えるのに必死だったんだ
……来るか？」

「……」

口元を手で覆い赤面している。

「おい？ どうしたの？」

心配になり、少し髪に触れた瞬間、

「ひゃあ！」

今度は彼女が氣絶する番だった。
てかやはり少女には刺激が強すぎたか？

氣絶する彼女を尻目に黙考する俺だった。

「おーい、大丈夫か？」

なかなか目を覚まさないので、ペシペシと頬を叩いてみると
ついでに布団がぶせた。

「んんっ」

よかつた目が覚めたみたいだ。

「あつ私、氣絶しちやつて
なんで布団引き寄せるんだ?
俺なんもしてねえよ？」

「君は結局なにがしたいの？」

色々聞きたいことがあつたが、とりあえず無難な質問をしてみる。

「私のパーティが集まるまで此処に住ませてくださいつ
見た目は完璧な人間だつた。

でも彼女には他にパーティが在るのだ。

「その間、身の回りのお世話をしますつ

彼女が言つてゐるのは、炊事、洗濯のことだらけ。

「住むのはいいけど、食費とかがなあー」

これは正直な意見である。

残念ながら俺が生活するだけで精一杯なのだ。

「あつそれなら大丈夫です」

彼女は何処からか取り出したのか、銀のアタッシュケースを取り出し、

「一億円入つています」

俺の前に札束を積んだ。

「それは君のだろ、君が食べる分だけ使つたらいい
人間には欲望がある。」

でもそれに忠実だと後々面倒な事になる。

彼女のように「期間限定」ならなおさらだ。

「欲しくないんですか?」

「そりや欲しいさ、でも君のお金だろ?」

俺の思いを感じ取ったのかは分からぬが、ケースをゆっくりとしまつた。

「…………」

なにかポツリと呟いた彼女、その表情には安堵と嬉しさが見え隠れしていた。

「あつそういうえば名前聞いてなかつたな」

少し気まずくなつた空氣をかえる為に別の事を聞いてみた。

「今、私の名前はないの」
また重いな。

「うーん、いつまでも女の子を君とかお前とか呼べないんだけど」
なんか夫婦みたいだしつと心に付け加えておく。

「なら貴方が私の名前を付けて」
するがる様に見つめる彼女、

「まあ、しかたないか」
そう返事したのはいいが実はネーミングセンス最悪な俺。

悩みに悩んだ彼女の名前は実に単純な名前だった。

「よし！ 決めた、君の名前は……」
その名前を告げたとき彼女は目をまん丸と見開き、しばらく考え込んでいた。

……が、

「貴方の必死になつて考えた名前だから」
との理由で、気に入つたみたいだ。

「これから少しの間、よろしくねつご主人様！」
柔らかな笑顔を振りまく彼女はとても愛らしかった。

「いやとゆづねり、何故に格上げ？」

「あつもひこんな時間」「

惚けている俺を尻目に彼女は台所へと急いだ。

鼻歌とまな板の音が心地よく聞こえてくる。

いそいそと支度をする彼女の後姿を見ながら、俺は今後の事を考えていた。

「まつ何とかなるだ」

無論、一瞬で考えるのをやめた。

今は彼女の音色を聞いていたい……そう思つたから。

「はい出来上がり！」

豪華な料理がちゃぶ台に置かれる。

彼女曰くこれは記念日だそうだ。

「よろしくな

俺は遅れた言葉を乾杯と同時に言つた。

そつ、彼女……「ネジ子」との共同生活は始まつたばかりなのだから

51。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
?
.

(後書き)

初めましての方もそうでない方もはじめまして！

作者の黒ぷりんです。

恋愛小説なんて書かねえよ…… つとブログとかで言つていきましたが
残念ながら書いてしまいました（爆）

筆を適当に滑らせたらこんな小説になつたのです。

本能に任せて書くとか野生児ですね。

とはいって企画案はかなり前に書いていました。

もちろん面白半分に書いたので、小説になるとは思いませんでした
よ。

とりあえずこのお話は短編として投稿させていただきましたが、気
分が乗りに乗つたとき、続きを書くかもしれません。

ですが、期待せずに別の恋愛小説を読むことを推奨します。
ではではまだどこかで……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7019e/>

SCREW！

2010年10月9日02時35分発行